

年間第十主日

2013.6.9

ルカ 7・11-17

ルカ福音書 7 章に告げられている今日の福音の前に立たされる時、私たちは言いようのない切ない思いに胸ふさがれます。私たちが信じているイエスは、今日の福音が告げているように、墓地へと向かう棺に納められてしまった一人息子を目の前で生き返らせて、その母親に返し与えてくださったイエスです。イエスがなさってくださったこのような驚くべきことを語った後で、ルカ福音書はその場に居合わせて、この出来事を目撃した人々の反応を語ることによって、今日の福音のエピソードを締めくくっています。

「人々は皆恐れを抱き、神を賛美して『大預言者が我々の間に現れた』と言い、また、『神はその民を心にかけてくださった』と言った。イエスについてのこの話はユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。」

今日のエピソードを語る福音書の意図は、確かに、この結びの部分に示されています。私たちが信じているイエスは、今日の福音に語られているような信じがたいことを、この世界にもたらしてくださったお方です。けれども、このようにして人々の間に広まって行ったイエスの評判を聞いた、同じように愛する者を失った母親たちの心に、この知らせはどのように響いたのでしょうか。今日の福音が告げるこのような知らせは、それらの母親たちにとっては、あまりにも残酷なもののように思われませんか。ナインのやもめのためにその一人息子を生き返らせてくださったと伝えられているイエスは、同じような悲嘆の中にある母親たち所にも来て、何故同じことをしてはくださらないのでしょうか。そのような母親たちの悲しみに思い至る時、私たちはイエスが行われたことを目撃して熱狂する人々の渦を離れて、むしろ、今日の福音の最初の場面に戻るように促されていることを感じるはずです。ナインの町の門を出て行く、愛する一人息子の棺に寄り添う母親とともに野邊の送りの葬列に加わらざるを得なくなっている自分を見出すはずです。そのようにして、私たちは私たちの信仰の悲しみを知らなければなりません。その悲しみを置き忘れて、今日の福音に語られているイエスが行われた驚くべきことを喧伝するだけでは、私たちの信仰は、私たちが生きる生の悲しみに触れることはありません。私たちの生の悲しみに触れることのない信仰は、悲しみの中にある人々に残酷さをもたらすだけです。今日の福音が告げるイエスを信じる私たちの信仰は、愛する者を失った悲しみの中にある無数の母親たちの悲しみに結ばれることによって、真の信仰へと成長して行くのです。

福音書の中には、イエスが行われた数々の奇跡のみわざが伝えられています。

今日の福音が告げているイエスがあの母親のためになさってくださったことも、確かにそのような奇跡のみわざです。けれども、私たちは、福音書に語られている以上の、もっと私たちの心を打つ奇跡を私たちの身近に経験しているはずです。愛する者を失った深い悲しみの中あって、今日の福音が告げているイエスと出会った多くの母親たちを私たちは知っています。その母親たちのためにイエスは今日の福音に語られているような奇跡を行ってくださらないのに、今日の福音に語られているイエスの奇跡の物語を聞くことは、それらの母親たちにとって、その悲しみを増すばかりであるとしか思えないのに、その悲しみの中で、今日の福音に語られているイエスへの信仰から離れない母親たちが私たちの中に、私たちとともにいるのです。そのようにして、私たちが信じるイエスは、福音書に語られている以上の奇跡を、私たちの中に行っていてくださるのです。私たちの心がそのような母親たちの信仰の悲しみと一つに結ばれる時、私たちは、私たちの中でイエスが今も行っておられる奇跡の目撃者たちとなる事が出来るのです。私たちの教会の集いが、そのような悲しみの中ある人々の信仰によって支えられていることに、もっともっと気付く恵みを願いたいと思います。そのことに気付くことができる時、私たちは、私たちの中に、今も、その奇跡のみわざを行っておられるイエスに気付くことができることでしょう。

棺に収め、墓地に埋葬されることになってしまった一人息子を母親に返し与えてくださったイエス奇跡の物語を語る今日の福音は、同じような境遇に置かれた母親たちの悲しみには目をつむって、むしろ、その母親たちの心の悲しみをかきむしるようなことを語っているだけなのではないでしょうか。慰めようない深い悲しみの中に取り残された一人の母親に、その息子を返し与えてくださった、今日の福音が告げる私たちが信じているイエスは、どのようなお方であるかを私たちは知っているはずです。福音書が私たちに告げるイエスは、今日の福音に語られているような、私たちには信じがたい奇跡を行われたイエスだけではありません。私たちが信じているイエスは、わずか三十数年の人生を、十字架の死をもって終えられたイエスです。そのようにして、十字架の上に死んで行かれたイエスは、今日の福音を一層の悲しみの中に聴かなければならない母親たちのために、我が子の十字架の下に立ち尽くしたその母を残してくださったのです。そのような母を後に残すことによって、私たちが信じるイエスは、今日の福音の悲しみの葬列の中のあの母親に出会ってくださったように、同じ悲しみの淵にいる全ての母親たちの悲しみを知っていてくださるのです。そればかりではありません。悲しみの底に突き落とされたその母を後に残して、棺に収められることもなく墓に葬られて行ったイエスは、この世の全ての悲し

みを背負って、神のみもとに行かれたのです。そしてそのことを、復活によって弟子たちに示してくださったのです。私たちが信じているイエスは、そのようなイエスです。そのイエスの、「もう泣かなくてもよい」という、今日の福音のあの母親に語りかけてくださったみ声が、悲しみの底を生きる私たちの心に届く時、私たちは今日の福音のあの母親と同じように、涙のうちに、十字架の上に死んで、この世の悲しみの中にある私たちに新たないのちへの道を切り開いてくださったイエスに向かって目を上げることが出来るのです。

今も愛する者を失った深い悲しみの中にある全ての母親たちの悲しみをこの世に生きる私たち全て者の悲しみとして受け止め、十字架の上に死んで神のみもとに行かれたイエスが、私たちのために残して行かれた、私たち教会の母である聖母とともに、私たちが信じるイエスに目を上げてこのミサをともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高